

トマスにおける「個」の意味

加藤 雅 人

序

今、ここに⁽¹⁾一輪の赤いバラがある。そしてそれを見ているソクラテスという個人がいる。我々にとって一見自明と思われる「一」或いは「個」という概念は、三位一体論を展開するトマスにとって、ペルソナの個性性を論理的に基礎づけるために⁽²⁾極めて重要な概念であった。ポエティウスによれば、ペルソナとは「理性的本性を有する個の実体」*rationalis naturae individua substantia* のことに他ならないからである。⁽³⁾ペルソナについて理解するための基礎論としてトマスにおける「個」の意味を考察すること、それが小論の意図である。

I

トマスが「個」を捉える基本的枠組はアリストテレスによって与えられている。アリストテレスにおいて、「普遍的なるもの」*τὰ καθόλου* と区別された「個的なるもの」*τὰ καθ' ἑκάστων* とは、論理的な次元で言えば「主語 (*ὑποκείμενον*) について語られないもの」のことであって、これは「基体 (*ὑποκείμενον*) においてあるもの」(=附帯性) も「基体においてないもの」(=実体) も共に含んでいる。⁽⁴⁾しかし、アリストテレスにおいてもそして又トマスにおいても、中心的に「個」の概念が見い出されるのは実体の類である。なぜなら実体は自己自身によって個体化され (*individuari*) しているが附帯性は基体としての実体によって個体化されるからである。⁽⁵⁾アリストテレスにとって個の実体は、類 (*γένος*) や種 (*εἶδος*) などの第二実体と区別された第一の実体 (*ἡ πρώτως οὐσία*) であり、それこそが真にウーシアの名に値する⁽⁶⁾実在であった。しかし、第一実体と第二実体のこの区別が次の二つの問題を引き

起こした。即ち、形相と質料の複合実体における個体化の根源は何かということ、単純実体における「個」という概念の意味は何かということである。

トマスはアリストテレスの残したこの問題を自覚していたと思われる。トマスは複合実体 (*res compositae*) に関する限り個体化 (*individuatio*) の間が二つに区別されることを指摘している。即ち、一つは個体化の根源 (*principium*) であり、一つは個体化の概念 (*ratio*) である。前者は質料であるからその意味での個 (*individuum*) という概念は神には適合し (*competere*) ない。しかし後者は「非共通性」*incommunicabilitas* であって、この概念を意味する限りにおいて神にも *individuum* ⁽⁷⁾ ということが言われるのである。

従って以下の考察は、まず複合実体の個体化の「根源」*principium individuationis* が質料であるという命題のトマスにおける多様な文脈を整理し、そこから複合実体における「個体化」*individuatio* そのものの二重構造を明らかにする。次に *incommunicabilitas* という個体化の「概念」*ratio* がやはり二重のし方で見出されることを、「一」*unum* の概念との関係で明らかにすることによって、複合実体および神を含めた単純実体の全存在領域に渡って、何らかのし方で語られる「個」の意味の探究へ向かう。

II

個体化の根源が質料であるという考えをトマスはアリストテレスから受け継いで ⁽⁸⁾ いる。しかしこの問題は少し詳しく考察すると次の4つの部分的な問題に分解されると思われる。⁽⁹⁾ (1) 可感的個物が如何にして知性認識されるかという認識論の文脈における、個物のどこから普遍概念は抽象されるか、という問題。(2) 共通本性 (*natura communis*) あるいは種の本質 (*essentia speciei*) と、その本性又は本質を有する具体的個物 (*res naturae*) とは何によって区別されるのか、という問題。(3) 同じ本性を有し、従って同じ種に属する複数の *res naturae* の多数性は何によって生じるのか、という問題。(4) それ自体は多において受容される自然的形相の第一の基体は何か、という問題。この4つの観点から、トマスにおける個体化の根源が質料であるということの意味を考察しよう。

(1)の問題。トマスは、『スンマ』の「我々の知性は個物を認識するか」という問

題のなかで次のように言う。⁽¹⁰⁾「質料的なものにおける個物(singulare)を我々の知性は直接かつ第一義的には(directe et primo)認識できない。その理由。質料的なものの個体化の根源は個的質料(materia individualis)である。しかるに我々の知性は、このような質料から可知的形象を抽象することによって知性認識する。しかし個的質料から抽象されたものは普遍(universale)である。従って、我々の知性は直接的には普遍しか認識できない」。又『真理論』において次のように言う。⁽¹¹⁾「我々の知性のうちにあるものの類似は、個体化の根源であるところの質料及びすべての質料的条件から切り離されたものとして受け取られるので、本来的な意味で言えば、我々の知性は個物を認識するのではなく、普遍をのみ認識する」。

これらの箇所、個的質料といわれたり、又単に質料といわれたり質料的条件といわれたものは何であろうか。それは、指定質料(materia signata)である。指定質料がこの場合の個体化の根源であり、すべての知性が「ここ」と「今」とから抽象を行なう時、この指定質料から普遍概念を抽象するのである。⁽¹²⁾そしてこの指定質料は、「限定された次元の下にある」sub determinatis dimensionibus existens ⁽¹³⁾とされている。

(2)の問題。トマスは『デ・エンテ』において、個物と種の本質とはどこが異なっているのかという問題を敷っている。そこではまず、複合実体において本質が形相と質料を共に含むのでなければならないことを論証した後、次のような問を立てる。「しかし、個体化の根源は質料であるから、質料と形相を同時に含む本質は単に個的なもの(particularis)であって普遍的ではないことが帰結するに思われる。従って、もし本質が定義によって表示されるものであるとすれば、普遍は定義を持たないことになってしまおう。⁽¹⁴⁾」。

この異論に対してトマスは次のように答える。「質料はどのような意味においても個体化の根源と受けとられるのではなく、ただ指定質料のみがそうなのである。つまり、限定された次元の下に考察された指定質料のことである。しかしこの質料は、人間である限りの人間の定義に指定されず、ソクラテスの定義において(ソクラテスが定義をもつとすればであるが)指定される。人間の定義には、非-指定質料(materia non signata)が指定される。従って、人間の本質とソクラテスの本質とは、⁽¹⁵⁾指定性と非-指定性という点に関してのみ異なる」。この文脈においても、(1)

の場合と同様に指定質料が個体化の根源であり、それは「限定された次元の下に考察された」sub dimensionibus determinatis considerata 質料である。

(3)の問題。トマスは『対異教徒大全』のなかで次のように言う。「その他の附帯性のなかで次元的量 (quantitas dimensiva)⁽¹⁶⁾ だけが、それ自体で個体化されているという固有性 (proprium) を持っている。その理由。次元的量の概念のなかには位置 (positio) が含まれているからである。位置とは全体における諸部分の秩序 (ordo partium in toto) のことである。実際、量はこうした位置を持っているのである。ところで、同一の種のなかに諸部分の多様性 (diversitas) が認められるならそこには常に個体化が認められる。一つの種に属する複数のものは、個によってのみ多数化される (multiplicari) からである。そして次元的量のみが自らの概念のうちに、同じ種に属する個の多数化 (multiplicatio) が生じうることの根拠を有する。それ故、この多数化の第一の根拠は次元からくると思われる。なぜなら、実体の類においても多数化は質料の分割によって生じ、この分割は次元の下に考察された質料に関してのみ理解されうるからである。実際、量を取り除くと、すべての実体は分割されえなくなるからである」。この文脈から明らかのように、同じ種に属する複数の個の多数性の根拠としての個体化の根源は次元的量⁽¹⁷⁾である。

(4)の問題。トマスは『スンマ』の「神に質料と形相の複合が認められるか」という問の異論で次のように言う。「質料は個体化の根源であると思われる。実際神が多くものについて述語されることはないからである。ゆえに神は質料と形相とから複合されている」。この異論に答えて言う。「質料に受容されうる (receptibilis)⁽¹⁸⁾ 形相は、その質料によって個体化されている。質料はすべてのもののもとに在る第一基体 (primum subiectum substans) であるから、他者において在るということとはできない。これに対し形相は、何か他のものによる妨げのないかぎり、複数のものに受容されうる。ところが質料に受容されえざ独立に自存する (per se subsistens)⁽¹⁹⁾ 形相は、まさにその「他者に受容されえない」ということによって個体化されている。神はそのような形相なのである。故に、神が個であるからといって神が質料を有するという事は帰結しない」。この文脈において、質料が個体化の根源であるということは質料が第一の基体としてそれ自体は「他者に受容されない」という在り方をしている限りにおいて捉えられている。複合実体の個体化の根源が質料であ

るといふことは、以上(1)(2)(3)(4)の多様な文脈において展開されている。

III

次に個体化の「根源」の多様な文脈において現われた「個体化」そのものについて考察しなければならない。複合実体における個物が普遍概念や共通本性との関係において考察された場合((1)と(2))の個体化の根源は指定質料であった。質料のこの指定性は「限定された次元」すなわち次元の量によってもたらされる。次元の量は一つの種のなかに、同じ共通本性を有し我々の知性によって同じ普遍概念で認識される個物が多数あることの根源でもある((3)の場合)。従って、(1)(2)(3)の場合は結局「個体化」ということが、種から個への多数化(multiplicatio)の観点で捉えられている。

これに対して(4)の場合、「個体化」は「他者に受容されない」という観点から捉えられている。この場合、個体化の根源としての質料は基体として形相を受容するという働きが前面に出ている。「他者に受容されない」ということは、形相と質料の複合実体が「自己自身において存在する」*in se existere* ということである。*existere*の根源は形相であるにしても、*in se* ということの根源は質料である。そして *in se existere* ということとは「自存する」*subsistere* ことであるから、質料は形相の⁽²⁰⁾もたらず *existere* に *in se* をつけ加えることによって複合実体の *subsistere* の根源であり、その意味で個体化の根源である。従って(4)の場合、「個体化」されるということが *subsistere* という観点で捉えられている。

実際、トマスは被造物において個体化の根源の果たすべき機能として、次の二つを明示している。⁽²¹⁾即ち、自存することの根源(*principium subsistendi*)と共通本性を持つ個体(*suppositum*)が互いに区別される(*distingui*)ことの根源とである。以上から明らかなように、複合実体において「個体化」*individuatio*は *multiplicatio* (或いは *distinctio*)と *subsistere* という両面性を持っているのである。

IV

複合実体の「個体化」の二つの意味に対応して個体化の「概念」*ratio individuationis* 或いは個の「概念」*ratio individui* も又二重性を持つ。トマスは『スンマ』

で次のように言う。⁽²²⁾「実際、個の概念 (ratio individui) には多において存在し得ないということが属する。これは二つのし方で生じる。第一に、本性的に他者において存在しないことによる。この意味では非質料的分離形相がそれ自体で自存しているので自己自身によって個体化されている。第二に、実体形相や附帯形相が本性的に他者において存在するが多において存在しないことによる」。ここから明らかなように、「多において存在しない」non in pluribus esse という個の「概念」はまず、それ自体で自存している(per se subsistens)形相、即ち非質料的分離形相(formae immateriales separatae)においてみられる。これらの単純実体は形相がそれ自体で subsistere し、subsistere することによってそれ自体で個体化されている。これに対して複合実体の場合は、形相がそれ自体で subsistere せず、形相と質料の合成体(compositum)が subsistere する。その意味で複合実体の subsistere は質料によって支えられている。そのみならず、そのような複合実体は量によって数的一性を与えられて、同じ種の他のすべての数的に一なるものから区別される、というし方で個体化されている。このように、「多において存在しない」という個の「概念」も、subsistere するものと数的に一なるものという二重の場合において見い出されるのである。

ところで、「多において存在しない」という個の「概念」は、「非共通性」という個体化の「概念」と同じ内容であると思われる。実際、「非共通性」incommunicabilitas とは、「一にして同じあるもの」aliquid unum et idem が (i)「多に分割されず」non in pluribus dividitur (ii)「多に述語されず」non de pluribus praedicatur (iii)「不可分である」non divisibile est⁽²³⁾ ということである。つまり「非共通性」の概念は、「一」なるものが「多においてない」ということによって成立する概念である。従って、「非共通性」或いは「多においてない」という概念は、「一」の概念⁽²⁴⁾に基いているのである。即ち「個」の概念は「一」の概念に基くのである。

周知のように、トマスにおいて「一」unum の概念は二つのし方で見い出される。一つは不可分の有(ens indivisum)を意味する「一」、即ち有と置換される「一」である。もう一つは、数の根源(principium numeri)としての「一」、即ち数的な「一」である。⁽²⁵⁾これら二つのし方で語られる「一」はまさに、「個」の概念の二つの場合に対応している。即ち、数的に一なるものにおいて見い出される「個」の概念

は、数の根源としての「一」の概念に基き、subsistere するものにおいて見いだされる「個」の概念は、有と置換される「一」の概念に基く。前者は、量による附帯的な「一」に基く、附帯的な「個」の概念を意味する。これは、複合実体においてのみ見いだされる「個」の概念である。後者は、存在論的な実体の「一」に基く「個」の概念を意味する。これは、複合実体と単純実体の両方の存在領域に渡って見いだされる「個」の概念である。神は自存する存在そのもの (ipsum esse subsistens) であるから、神に適合する「個」の概念は存在論的な「一」に基く「個」の概念である、というよりはむしろ神は「個」そのものと言わねばならない。

註

- (1) 山田晶『トマス・アクィナスの《エッセ》研究』p. 178 註(八)。
 (2) S. T. I, q. 29, a.1.
 (3) 何らかのし方で「個」を表示するラテン語は次の様に多様である。(i)〈singulare〉〈particulare〉は共に附帯性も含めた最も広い意味での「個的なもの」を表示する。III Sent. d. 6, q. 1, a. 1. (ii)〈subsistentia〉は自己自身によって (per se) 又は自己自身において (in se) 存在し、他者において存在するのではないところの「自存者」としての個の実体を表示する。S. T. I, q. 29, a. 2 c. (iii)〈res naturae〉は共通本性の下に置かれる「本性を持つもの」としての個の実体を表示する。この特徴を表示する概念語は〈suppositum〉である。ibid. (iv)〈hypostasis〉〈substantia〉は附帯性の基体となる個の実体を表示する。この特徴を表示する論理的概念語は〈individuum〉である。ibid. (v)〈persona〉は理性的な〈hypostasis〉或いは〈substantia〉としての個の実体を表示する。ibid. 又更に〈singularis〉〈particularis〉〈individualis〉〈individuus〉〈individuatō〉〈singularitas〉〈particularitas〉などの形容詞や抽象名詞がトマスによって使われている。しかし、これらの多様なラテン語の表現のもとに、なにか共通したし方で了解されている概念或いは意味内容を、「個」というあいまいな日本語のまさにそのあいまいさによって筆者は表わそうとしたことを理解されたい。
 (4) Cat. c. 2, 1a20—1b6; De Int. c. 7, 17a38—39.
 (5) S. T. I, q. 29, a. 1 c.
 (6) Cat. c. 5, 2a11—14.
 (7) I Sent. d. 25, q. 1, a. 1 ad 6; S. T. I, q. 29, a, 3 ad 4.
 (8) Met. V, c. 6, 1016 b 31—32; VII, c. 8, 1034 a 5—8; c. 9, 1035 b 30.

- cf. M. - D. Roland - Gosselin, *Le "de ente et essentia" de S. Thomas d'Aquin*, Paris, 1948, p. 104.
- (9) I. Klinger, *Das Prinzip der Individuation bei Thomas von Aquin*, Würzburg, 1964, p. 65.
- (10) *S. T. I*, q. 86, a. 1.
- (11) *De Verit.* q. 2, a. 6 c.
- (12) *ibid.* ad 1.
- (13) *op. cit.* q. 10, a. 5 c. なお、この指定質料が「限定された次元」の下にあるのか、「無限定な次元」の下にあるのかという解釈に関する問題は、M. - D. Roland - Gosselin, *op. cit.* pp. 104—117 及び I. Klinger, *op. cit.* pp. 2—10 参照。
- (14) *De ent.* c. 2
- (15) *ibid.*
- (16) *C. G. IV*, c. 65.
- (17) しかし、ここで直ちに問題となるのは、それ自体一つの附帯性であるところの次元的量が、実体形相に先立って質料を分割し、実体の多数化 (= 個体化) を根拠づけることが可能であるのかということである。この困難な問題に対するトマスの解答は、実体形相の一性を堅持しながらも、ある意味で上位の形相に先立って質料の分割を可能にするような次元的量の働きを認めるという少しわかりにくい説明になっている。トマスは *S. T. I*, q. 76, a. 6 ad 2 で次のように言う。「次元的量は、質料の全体に行き渡っている物体性 (*corporeitas*) に伴う附帯性である。それ故、物体性そして次元の下にすでにおかれた質料は、様々な部分に分割されてあると理解されうる。その結果、そのような質料は、より上位の完全性の段階に関して様々な形相を受け取るのである。というのも形相は、質料に完全性の様々な段階を与える本質に関しては同一のものであるが、概念的には異なっているからである」。従って、質料のうちに認められる次元的量の上位の形相に対する先在性は、概念的な先行性であって、実在的に一なる実体形相の端的な先行性を決して妨げはしないのである。cf., *Q. d. De anima*, q. 9 c.
- (18) *S. T. I*, q. 3, a. 2 arg. 3.
- (19) *ibid.* ad 3.
- (20) *op. cit.* I, q. 29, a. 2 c. なお、*subsistere* のトマスにおける意味については、山田晶, 前掲書 pp. 163—194 参照。
- (21) *De pot.* q. 9, a. 5 ad 13.

- (22) *S. T.* III, q. 77, a. 2 c.
- (23) *I Sent.* d. 25, q. 1, a. 1 ad 6.
- (24) M. - D. Roland - Gosselin. *op. cit.* p. 125.
- (25) *S. T.* I, q. 11, a. 1.
- (26) *op. cit.*, I, q. 4, a. 2 ; q. 7, a. 1 c.